

魂の不安・体の痛み

——17世紀ニューイングランドにおける身体感覚と宗教——

荒 木 純 子

〔キーワード〕 初期アメリカ、宗教、身体、悪魔憑き、感覚

はじめに

17世紀ニューイングランドのできごとで初期アメリカ研究者の想像力を現在でもかきたててやまないものの一つに、魔術と魔女裁判がある。歴史学者メアリ・ベス・ノートンの研究によると、1692年のセーラムにおける魔女狩りは実はネイティヴ・アメリカンとの二つの戦争、フィリップ王戦争(1675-1678)、ウィリアム王戦争(1689-1697)と大きくかかわっているという。メインのフロンティアにある村でそれらの戦争の大きな被害にあった白人の遺族や子孫が、被害を抑えることのできなかった白人の統治者や身内の者たちを、悪魔憑きのさなかに悪魔であると指名していたという構図があるとノートンは述べている。この分析は1692年の有名なできごとを、これまでのセーラム中心にいわば望遠レンズで眺めていたものから広角レンズに換えて視野を広げたことによって生まれた、興味深い研究である。また、悪魔という存在が実はネイティヴ・アメリカンと結びつけて考えられていたのではないかという従来の指摘の裏付けともなっている。¹⁾さらに、この研究はセーラムの事件で多くの男も魔女として名指しされていた事実を明らかにした点でも画期的である。それでも魔女として裁判記録に残る人がなぜ女ばかりであったかといえ、訴えを受けた人が取り合わず、男を裁判にかけることがあまりなかったためであるという。²⁾

そのほかにも、魔術や魔女裁判という事件はこれまでさまざまな手法や角度で研究されてきた。³⁾しかし依然として、魔術ではいったい何がなされていたの

(2)

かという根本的な疑問あるいは興味にすっきりとした回答は与えられていない。現在の常識が通用しない 300 年以上離れた時代に関するそのような疑問がそもそも解決されうるかと考えると、実際の可能性はかなり低いと思われるが、それでも、魔術によって悪魔に取り憑かれたと主張する人々が自分の身に起こったことをどのように感じ取り、説明し、理解していたのかという点は探ることができそうである。周囲の人々もまた、そのような発言を整合性があると納得していたわけでもあるので、今も昔も同じように身体を持つ人間が当時どのような感覚を持って、どのような体験をし、それをどのように把握して自分をとりまく世界を見ていたかを垣間見ることは、意義あることのように思われる。

小論は、当時の人々をとりまく生活空間を彼らの語る体験から構築しようとする試みの一部である。民俗学者デイヴィッド・ハフォードは、カナダのニューファンドランドに伝わる民間伝承、“Old Hag”を研究する中で、体験⁵⁾を主体として文化を分析する姿勢を提唱した。ハフォードはこの“Old Hag”がカナダの一地方だけでなく、現代アメリカにおいても体験されていることを発見し、さらにセーラムの事件で活躍した牧師コットン・マザーが記録した悪魔憑きの例にも言及する⁶⁾。ハフォードの記述をたどると、“Old Hag”とはおそらく日本でいう「金縛り」のような現象である。しかしそうとはいえ、ここで悪魔憑きは金縛りと同様の現象であったと結論づけるつもりは全くない。そうではなく、そのような体験の語られ方に注目し、たとえば金縛りにあった日本人がその体験をいかに強い恐怖と衝撃とを持って受け止めており、その体験をどのように意味づけようとするかという点に、むしろ共通点を見いだしたいと考えるのである。

一方、初期アメリカ研究においても歴史学者ピーター・ホフファーは、所属する社会の文化的規範に沿った形で語られる感覚というものが、人々の行動や思想にいかにか強い影響を与えるかを考え、独立以前のアメリカ社会における世界観を明らかにしようと意欲的な取り組みを行っている⁷⁾。17 世紀ニューイングランド社会において文化的規範にもっとも大きな影響を与えていたピューリ

タニズムの伝統の中、キリスト教徒である白人が異教徒であるネイティブ・アメリカンと出会ったことは、さまざまな感覚の上でそもそもたいへん大きな衝撃であったことは想像に難くない。ホッファーはそのような衝撃に目配りしながら、さらに魔術及び悪魔憑きに関しては、マザーを初めとするニューイングランドの牧師たちが、体験者の語る感覚についての証言や観察者としての体験を慎重に扱う必要性を感じつつも重視していたことを指摘している。⁸⁾

また、西洋キリスト教社会においては伝統的に“spirit possession”として、聖霊か悪魔かどちらかの目に見えない霊のようなものが人間の身体に憑依する出来事がしばしば観察されている。それが初期アメリカという文脈においては、17世紀の悪魔憑きと18世紀前半に起きるリヴァイヴァル運動の中で典型的に見られるといえる。これらの“spirit possession”が本当の出来事か単なる振りであるのか、また望ましいものか望ましくないものであるかを見極めに、当時の牧師たちは懸命になった。その際、ともに似たような身体現象でありながら異なる結論が導き出される性差、人種、階級ともかかわる文化的社会的背景については、今後さらなる研究が必要である。⁹⁾そして、この18世紀前半のリヴァイヴァル運動以降のアメリカ社会における宗教と身体的経験との関わりについては、宗教史学者のアン・テイヴスが19世紀スピリチュアリズム、心理学研究の確立へという流れの中で読み解こうと、意欲的に研究を行っている。¹⁰⁾このように宗教を体験すること、感覚を持った身体として人間が生活する際の表象を考えることは宗教的な国家アメリカを考える上で興味深い視点であるが、こと17世紀に関してはまだそれほど研究がなされていない状況であり、今後の研究が待たれるところである。

そこで、ここでは17世紀の身体と宗教にかかわる現象についての考察への取りかかりとして、魔術及び魔女裁判の史料の中から悪魔憑き現象に注目したいと思う。その際、身体に降りかかった災いについての訴えに焦点を当てて分析する。ただしそれらの記録は、裁判の証言の中で本人が説明していることもあれば、第三者が伝聞の話として発言している場合もある。また、たいへん詳しい記述もあれば、できごとが起きたことを単に伝えるのみの場合もある。さ

(4)

らには、魔術にかかわったとされる人や裁いた人の子孫が見せたくない史料を処分し、あえて後世に残さないようにしていることもありうるという。¹¹⁾これら様々な事情により魔女裁判に関する史料は記録の目的や詳細さの程度など均一ではない。それでも全体として、17世紀のニューイングランドの人たちがどういう痛みや苦しみを感じ、それをどのように理解しようとしたのかのあらましが浮かび上がってくることと思われる。

魔女裁判のおもとは人間関係のもつれがあったということは、研究者のみならず、17世紀の牧師ジョン・ヘイルも指摘している。¹²⁾また、ヘイルが悪魔憑きの現象を詳しく書くときと真似をするものが出ると書き留めているように、悪魔憑きにはまわりの人たちに及ぼす影響力も大いにあった。¹³⁾すなわち、人間の心理というものが悪魔憑きには大きな影響をもたらしていたと考えられるのである。そこでまず、17世紀の人々にとって一番の気がかりであったはずの死後の救済の証について、日々、人々がどう感じていたかについて見てみることから始めることにする。

1 救済の証

17世紀ニューイングランドの宗教においては、死後、救済され永遠の命を得る者は生まれたときから運命づけられていることになっていた。救済されないことを予定された人間は地獄に堕ちることになる。そして、どの人が救済されるかについては神だけが知っていて、人間にはうかがい知ることにはできないとされていた。ただし、救われる人の行いは神から見て正しいものであるから、善行をつむ者は救済を予定されている可能性があった。しかしながら、偽善者でも善行をなすことはできる。そのため、いくら善人であっても、そのことが救済される証とはならなかったのである。

17世紀の人々にとって日常生活と切り離せない神に対する信仰は、このような自分では判断し難い理論に基づいていたため、人々の信仰心もときによって揺らいだり確固たるものとなったりと、浮き沈みのあるものであった。¹⁴⁾そもそも、神の国の地上での現れである教会に所属するために人々は神を感じた回

心体験を自ら語らなくてはならなかったが、その体験の記録の上でもその気分的な浮き沈みというものが確認できる。たとえば、ケンブリッジ第一教会の牧師トマス・シェパードは教会の信徒ジョン・シルとジョアンナ・シル夫妻の回心の告白を書き残したが、その記録からは彼らが自分たちの状態についての不安をつねに抱いて生活していることが明らかである。ジョンは何度も何度も信仰心を試されるような誘惑にあつては悩み、そのたびに神のことばによって救われ、「次第に神は彼にあるものを見せるようになった」という状態になる¹⁵⁾。ジョアンナもあるときに神の喜びを感じるが、それが本物であると信じられずに迷い、その喜びが去ったあとに神の存在を感じようとも感じられずにいた。そして「神に信じていないことをとがめられて、神を切望するようになった」と語る¹⁶⁾。このように、人々は常に神とともに歩んでいるかという点について自分のことを厳しく見つめ、自分が救済されるかの証を不安なまま追求していた。

これが極端な形で追求されると、故意に罪を犯して救済されない証を得るという行為にもつながる。マサチューセッツ湾植民地総督ジョン・ウィンスロップの日記に登場する、「錯乱し」て自分の子どもを井戸に投げ込んで殺そうとし、救済されない証を得ようとした事件を起こした女性の話は有名である¹⁷⁾。そこまでいなくてもシェパードの教会にもエリザベス・オルボンのように、自分の「罪がたいへん重いと感じ、そこから抜け出す可能性を全く見いだせないでいた」信徒がいた¹⁸⁾。このように、人々は日々、救済の証が得られるか得られないかわからないという強い不安を感じる状態にあったのだった。

しかし、そのような不安に陥ることとは対極に位置するような、自分の救済を確信しているかのようにふるまう信徒もいた。1638年にマサチューセッツ湾植民地から追放されるアン・ハッチンソンはその典型といえるが、彼女は個人で神の啓示を得て、それが間違いなく神からの正しい啓示だと主張したのだった。シェパードをはじめとするマサチューセッツの正統教会に属する牧師たちにとって、これは啓示ではなく「幻惑 (delusion)」であり、悪魔からうけた誘惑であった¹⁹⁾。

(6)

そして、悪魔に人間を誘惑するきっかけを与えるものとして問題であったことがからこそが、このような救済の証を確信することであった。²⁰⁾見方を変えれば、魂の救済の証というものは、当時の人々にとって、得たいけれど確信は持てない、もしくは得たと思えても次の瞬間には幻のように消えて落胆させられる、それほど切実な、不安を引き起こしうる問題であったといえる。

これらの証言及びこの時代の説教などに出てくる悪魔というものは、現代的な感覚とは違い、17世紀の人々にとっては比喩的なものではなかった。それは実際に身近に出現しうる存在で、人々の恐怖のもとになり得た。そして悪魔は精神的なことながら、あるいは現世的なものを持ってあらわれては人間を誘惑し自分の手下にしようとしていると、人々は考えていたのだった。しかも悪魔はずるがしこい方法を用い、執拗に人間を誘惑に陥れようとする。神の力を最終的には超えられないにせよ、神を倒そうとする非常に強い敵であると人々は²¹⁾考えていた。

牧師たちが悪魔について説教するときには、悪魔の神学的側面を説明していた。悪魔は人間を誘惑して墮落させ、手下にしようとする。それも誘惑しやすい人、すなわち小さな罪を犯してすでに少し墮落しかけている人間のところに誘惑を持っていくというのだ。そこでその誘惑に乗って手下である魔女になってしまったら二重に罪を犯すことになってしまう。その一方で、一般の信徒は日常におこる不可解なできごと、不都合なできごとを悪魔の仕業であると理解しがちであった。常に人間を誘惑しようと身のまわりをうろつく悪魔は、一般の人々にとっては身近な悪事を働いて自分に危害を与えうる存在として認識されていたのだった。

このようにして、魂の救済の確証を得られないでいた人々は、常に不安にさらされ、さらには悪魔からの誘惑にもさらされていることになった。その結果、悪魔とは神学上の神の敵であり、同時にいつ身の回りに出沒して攻撃をかけてくるかわからないような、恐怖を与える存在でもあったことになる。

2 悪魔憑きという現象

17世紀の人々はこうして身近に神のみならず、悪魔の存在をも感じつつ生活していた。このような生活の中でもっとも劇的で目を見張るような場面が悪魔憑きであったといえよう。そこで、実際の悪魔憑きという現象を詳細に見てみることにする。悪魔憑きの描写には非常に強い力で舌が突き出されることや、口が閉じているのに声が出ることなどのように、器官としての口や広く発話のしかた(speech)にかかわるものが多い。またおしゃべりで争いの種をまくような女が、魔女として訴えられる典型であったことも指摘されている。²²⁾しかし、ここではこれらのような観察者たちの記述に加え、体験した者による自覚的な現象に関わる描写をとくに取り上げてみたい。

まず、記録の上で憑依現象のもっともわかりやすい指標は“fit”という表現である。これは通例観察者が憑依されている者を描写する場合に多く使われている。たとえば、悪魔憑きの最も詳しい記録の例として知られている少女エリザベス・ナップのようすを描写するとき、それをエリザベスの魂の指導者としてつぶさに観察した牧師サミュエル・ウィラードは「“violent fit”に陥った」²³⁾と語っている。この場合の“fit”は激しい力が加わる発作ということで、現在一番“fit”でよく使われる意味の「引きつけ」や「痙攣」と考えて問題ないであろう。

しかしそれ以外にも、「卒倒」「失神」とでも訳すべき、身体の動きが伴わない“fit”も起きていた。たとえば「“swonding fit”に陥る」という表現が使われている。²⁴⁾この“swond”は「気絶する」という意味の、今は使われない形“swound”のことで、つまり意識を失って倒れてしまい動けなくなることである。²⁵⁾従って、悪魔憑きを描写する上でもっともよく使われる“fit”はたいへん広い範囲を網羅する発作、身体の不調であって、具体的には穏やかなものからたいへん激しい動きをするものまで、いろいろな種類があったと考えられる。²⁶⁾

そういった発作を起こす瞬間を表現したものに、アン・ステビンズの体験がある。1650年にスプリングフィールドで起きた、魔女だと疑われたヒュー・

(8)

パーソンズをめぐる裁判での彼女の夫の証言によると、彼女は暖炉の横の柱にパーソンズがぶら下がっているのを見たという。そして後ろに下がりつつ「ああ、彼が私の上に降りてくる」といった瞬間、“fit”に陥った。さらに、別の人の証言によると、パーソンズが門を通ったときにステビンズは“fit”におそ²⁷⁾われて「ああ、魔女だわ」と叫んだというのである。

ここで、ステビンズが最初の“fit”のときに感じた人間程度の重みや圧迫感のようなものに注目してみたい。魔女だと信じているパーソンズに身体に乗られたと認識して彼女は発作を起こしたということである。このような圧迫感は1656年にニコラス・ロウもまた感じている。夜中、ベッドに彼が魔女だと考えているジェイン・ウォルフォードがやってきて、「彼の胸に手をつき、そのため、彼は声を出せなかった」上に、翌日まで「たいへんな痛みが続いた」とい²⁸⁾う。そのほかにも牧師コットン・マザーが記録した悪魔憑きにもそのような現象がみられる。1692年のセーラムでの一連の魔女裁判におけるリチャード・コーマンの証言によると、ベッドで横になっているとき、ブリジッド・ビショップと二人の幽霊がやってきて身体を押さえつけ、「自分自身を動かすこ²⁹⁾ともできなければ、他の人を起こすこともできなかった」とある。その悪魔憑きの体験においてコーマンは、身体の内自由も声も奪われてしまったと語っているのだ。

このような魔女が身体に乗るという体験を、民俗学者ハフォードは、“Old Hag”の言い伝えと状況が似ていると分析する³⁰⁾。この“Old Hag”という現象は脳生理学的に言うと睡眠麻痺(sleep paralysis)か、ときに入眠時覚醒(hypnagogic hallucinations)という状態である。脳は覚醒していても、身体が睡眠中で動かないため、目を開けて何かを見ている気がするのに動けないという錯覚を起こし、たいへんな恐怖感と苦痛を伴う状況になるという。実際には夢を見ているので、その夢には気にかかっていることやものなど、身近なものが登場する可能性が高く、それを誰か身近な人、それも恐怖を覚えている人、憎いと思っている人が悪魔となった姿に映されるということはあると³¹⁾考えられる。そう考えると、睡眠中の身体に自然に起きる現象から生まれる恐

怖感が、日常、潜在的に感じている人間関係からくる恐怖に裏書きされ、悪魔に取り憑かれたという主張をする可能性が出てくるのである。もともと死後の救済についてたいへん大きな不安をあおるような宗教的背景があったことも、この現象がいかに恐怖感を増したかという点で忘れることはできない。

そのほか、悪魔によって苦しめられたという犠牲者本人による痛みの説明には、突かれる際の痛みでたとえられる表現が多く見られる。³²⁾用いられた道具は、ピン、とがったもの (prick)、杭 (stake)、槍 (lance)、ナイフ、短剣と、表現は多様であるが、多くは突き刺すことのできる道具である。³³⁾程度の激しいものだと、「ピンと短剣で内臓をグサグサと刺すように」という表現が用いられている。³⁴⁾ナイフには切るという用途がもちろんあり、食事のときだけでなく、たばこの先端を切り取るときにも使われていたようだ。³⁵⁾しかし、文化人類学者ジェイムズ・ディーツによると、当時のナイフは先端がとがっていて、肉などを切り分けるだけでなく、その後に切り分けたものを先端で突き刺して口に運ぶことにも使われていた。³⁶⁾実際に「ナイフのチクチクした感覚」という表現も見られる。³⁷⁾そのため、痛みを引き起こす道具がナイフであっても、切り裂かれるイメージというよりは突かれるイメージを表現するためのものと考えていいだろう。こうして、棘やピンのようなチクチクした痛みから槍や短剣などの命の危険にさらされるような道具によるグサグサと刺されるような痛みまで、道具により程度はまちまちであったが、悪魔に取り憑かれていると感じている間に、痛みのみならず、たいへん強い恐怖感を感じていたであろうことは想像に難くない。

ナイフという道具についてはさらに別の側面も見逃すことはできない。魔術での決まり事によると、悪魔の手下になるようにという誘惑に負けた人間は魔女となる契約をする際、本に自分の血で署名するという筋書きであった。そしてその署名のときにはナイフで指を傷つけて血を出すことになっていた。たとえば、エリザベス・ナップは契約書に署名しようと決意し、夜中にナイフを探すため居間に出てきたこと、また実際にナイフで切って署名をしたことを牧師ウィラードに告白している。³⁸⁾

(10)

このように考えると、身体の不調や痛みを感じたとき、それも通常では考えられないような耐え難い苦痛を感じたとき、それを人々は悪魔的にとらえ、魔術とかかわる身近な道具と結びつけて表現していた可能性があるのではないかと考えられる。魔女が身体に乗って圧迫感を与えて苦しめるという場合も、苦痛を感じたときの解釈の例に相当するとみなせるだろう。こうして自らの想像の範囲を超える苦痛を受けたときの恐怖感と、ふだんの生活で感じる精神的及び物理的なちょっとした不安感が相まったときに、人々は宗教上の悪魔についての説明を利用しながら自分たちの生活における体験を理解しようとしていたと考えられるのである。

おわりに

このように、17世紀ニューイングランドの生活空間における身体的な体験とは、宗教的なイメージにみちた世界における、宗教にかかわる言語で理解される体験であったと考えられる。もともとキリスト教には身体にかかわるメタファーが頻出する。たとえば、死後に神と結婚する人間の魂というように、それらにはセクシュアリティや性差にかかわるものも多かった。そして注目すべきことは、当時の社会における身体、身体のあり方はそのようなイメージにもとづいて構築されたものであったということである。³⁹⁾もちろん、身体は実体を持ったものとして今も昔も存在していたが、当時、その構造や機能については、誰もが共通で一定した不変の、いわば科学的な認識を持っていたわけではなかった。身体の構造や機能というものは、メタファーに満ちたイメージの上に実際の体験での強烈な感覚が引き金となって語られる、可塑的なものであったといえるだろう。悪魔憑きという現象はそのようなきっかけとしてはたいへん強力で、それだけ人々にとって大きな体験となった。

悪魔憑き現象をさらに追究すると、取り憑いた魔女であるとされた人には、望ましいとされる母になれない者、すなわち子を殺した母、閉経後の女、少女が多かったことも指摘されている。女性の生殖機能が神秘的で畏怖すら感じさせるものであったことから、これらの生む性としての女の身体機能を働かせて

いない女の存在は、あるべき秩序の崩壊を意味し、大きな恐怖を引き起こしている。その恐怖から悪魔的といえる身体感覚と結びつけたためではないかと考えられる。⁴⁰⁾となれば、宗教的メタファーによって語られる女の身体、そしてその機能と不調を見ることによって、当時の正しい女のあり方、さらには男と女という性差を分けるような根本的なものの見方を探ることができることになるはずである。そしてそれらを手がかりとして男女の望ましい身体のあり方から、社会における性差による役割分担までもが見通せるのではないかと考えられる。⁴¹⁾

また、産婆や医者役割を果たした身体的な癒しにかかわる者が魔女として訴えられることが多かったこともこれまで頻繁に指摘されている。治癒という変化を起こせるということは、死という変化も起こせることにつながるからである。⁴²⁾身体と関わる恐怖や不安、痛みの究極の形である死が癒す者の手によって偶然もたらされると、世俗的な面においても身近な存在であった悪魔の仕業であるというように、魔術に結びつけられやすかったのである。

このように、魔術と悪魔憑きという事象だけに焦点を当ててみるだけでも、17世紀ニューイングランド研究でこれまで注目されることがあまりなかった宗教と身体感覚という関係から、思いのほか大きな文化的社会的背景に関する論点が浮かび上がってくる。とくに性差と医術という面については今後のさらなる研究が必要であろう。本来、生きるためのよすがとなりうる宗教が、その人間の魂についての救済の理論の複雑さのため、ここまで17世紀の生活に不安を与えている源であったように見えるのは皮肉なことであるが、このような構造の謎を解く鍵は、宗教にある身体メタファーと実際に生じる身体感覚とのかかわりにあると考えられる。その点についてはまた、18世紀前半のリヴァイヴァル運動における身体感覚や奇蹟の問題も視野に入れて、アメリカ社会における宗教体験を読み解く研究の今後の課題としたい。⁴³⁾

¹⁾ Mary Beth Norton, *In the Devil's Snare: The Salem Witchcraft Crisis of 1692* (New York: Alfred A. Knopf, 2002).

²⁾ David D. Hall, ed., *Witch-Hunting in Seventeenth-Century New England: A*

Documentary History, 1638-1692 (Boston: Northeastern University Press, 1999), 68-69, n. 3.

- 3) Norton, *Devil's Snare*, 7-8, 10, 72.
- 4) ごく代表的なものをあげると、経済的な緊張感を描いた Paul Boyer and Stephen Nissenbaum, *Salem Possessed: The Social Origins of Witchcraft* (Cambridge: Harvard University Press, 1974), 精神分析的アプローチの John Putnam Demos, *Entertaining Satan: Witchcraft and the Culture of Early New England* (New York: Oxford University Press, 1982), 女性の経済状態に注目した Carol F. Karlsen, *The Devil in the Shape of a Woman: Witchcraft in Colonial New England* (New York: Vintage Books, 1989[1987]) など。
- 5) David J. Hufford, *The Terror That Comes in the Night: An Experience-Centered Study of Supernatural Assault Traditions* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1982).
- 6) Hufford, *Terror*, 220.
- 7) Peter Charles Hoffer, *Sensory Worlds in Early America* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2003), viii.
- 8) Hoffer, *Sensory Worlds*, Chapter 1, and 128.
- 9) 拙稿 “The Anatomy of Possession: Witchcraft and Religious Enthusiasm in 17th Century New England” 『東京大学アメリカ太平洋研究』 3 (2003): 77-93 では、その “spirit possession” のうちの邪悪な霊の有名な一例である Elizabeth Knapp の例を詳細に論じている。
- 10) Ann Taves, *Fits, Trances, and Visions: Experiencing Religion and Explaining Experience from Wesley to James* (Princeton: Princeton University Press, 1999).
- 11) Norton, *Devil's Snare*, 13.
- 12) Hall, *Witch-Hunting*, 6. ヨーロッパについては Lyndal Roper, *Oedipus and the Devil: Witchcraft, Sexuality and Religion in Early Modern Europe* (London and New York: Routledge, 1994), 202 など。
- 13) Hale, *A Modest Enquiry Into the Nature of Witchcraft, and How Persons Guilty of that Crime may be Convicted* (1697), 35.
- 14) Elizabeth Reis, *Damned Women: Sinners and Witches in Puritan New England* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1997), xv.
- 15) Thomas Shepard, “John Sill” in Michael McGiffert, ed., *God's Plot: Puritan Spirituality in Thomas Shepard's Cambridge*, revised and expanded ed., (Amherst: University of Massachusetts Press, 1991), 157-58.
- 16) Shepard, “Joanna Sill,” in *God's Plot*, 161.

- 17) John Winthrop, *The Journal of John Winthrop, 1630-1649*, Richard S. Dunn, James Savage, and Laetitia Yeandle, eds. (Cambridge: Harvard University Press, 1969), 229-30.
- 18) Shepard, "Elizabeth Olbon" in *God's Plot*, 152.
- 19) "The Examination of Mrs. Anne Hutchinson at the Court at Newtown" in David D. Hall, ed., *Antinomian Controversy, 1636-1638: A Documentary History*, 2nd ed. (Durham: Duke University Press, 1990), 340-48; Michael P. Winship, *Making Heretics: Militant Protestantism and Free Grace in Massachusetts, 1636-1641* (Princeton and Oxford: Princeton University Press, 2002), 109. 拙稿「初期ピューリタン植民地における想像力・身体・性差の境界——アン・ハッチンソンの裁判をめぐる——」『アメリカ研究』32 (1998): 127-44 でその裁判の流れについて詳しく論じている。
- 20) Reis, *Damned Women*, 62.
- 21) Reis, *Damned Women*, 65.
- 22) Jane Kamensky, "Words, Witches, and Woman Trouble: Witchcraft, Disorderly Speech, and Gender Boundaries in Puritan New England," *Essex Institute Historical Collections* 128 (1992): 286-307.
- 23) Samuel Willard, "A Brief Account of a Strange and Unusual Providence of God Befallen to Elizabeth Knapp" in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 199.
- 24) *New Haven Colonial Records*, 2, 29-36, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 63.
- 25) *OED*, 2nd ed., s. v. "swoond"; Hall, *Witch-Hunting*, 69, n. 4.
- 26) *OED*, 2nd ed., s. v. "fit," c. によると、意識を失ったり脱力する、あるいは痙攣を伴う病気に突然襲われることで、18世紀から修飾語なしで使われる。
- 27) Pynchon Notebook, Rare Books and Manuscripts, NYPL. Printed in Samuel G. Drake, *Annals of Witchcraft in New England* (1896; reprint, New York, 1972), 219-58, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 54.
- 28) *Provincial Papers: Documents and Records Relating to the Province of New Hampshire 1623-86*, Nathaniel Bouton, ed. (1867), 217-19; reprinted in Samuel G. Drake, *Annals of Witchcraft in New England* (1869), 102-107, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 96.
- 29) Cotton Mather, *Wonders of the Invisible World* (Boston: Printed, and sold by Benjamin Harris, [1692] 1693), 94-138, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 298.
- 30) Hufford, *Terror*, 221.
- 31) Hufford, *Terror*, 154.
- 32) Hale, *Modest Enquiry*, 31.
- 33) "prick" の17世紀の用法には棘から短剣まで多くの意味があり、前後関係から

判断がつかないため、*OED*, 2nd ed., s. v. “prick” V. の “Anything that pricks or pierces; an instrument or organ having a sharp point.” を採用した。

- ³⁴⁾ Pynchon Notebook, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 48.
- ³⁵⁾ Pynchon Notebook, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 40.
- ³⁶⁾ James Deetz, *In Small Things Forgotten: An Archaeology of Early American Life*, revised and expanded ed., (New York: Anchor Books, 1996), 168-69.
- ³⁷⁾ Pynchon Notebook, in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 36.
- ³⁸⁾ Willard, “Brief Account,” in Hall, ed., *Witch-Hunting*, 203, 205.
- ³⁹⁾ Susan Juster, *Disorderly Women: Sexual Politics and Evangelicalism in Revolutionary New England* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1994), 9.
- ⁴⁰⁾ Roper, *Oedipus*, 207.
- ⁴¹⁾ 初期キリスト教会における考え方については Elizabeth A. Clark, *Reading Renunciation: Asceticism and Scripture in Early Christianity* (Princeton: Princeton University Press, 1999).
- ⁴²⁾ Hall, *Witch-Hunting*, 5.
- ⁴³⁾ Susan Juster, “Mystical Pregnancy and Holy Bleeding: Visionary Experience in Early Modern Britain and America,” *William and Mary Quarterly* 57 (2000): 249-88.